

「かほはゆし！」

宮崎和彦

【あらすじ】

時は明治4年、江戸改め東京神田。男たちは丁髷から散切り頭へ変わったが、女たちは未だに重たく不便な結髪であった頃のお話。半人前の女髪結いきぬ(25)は町で出会った元会津藩の士族、逸見恭介(32)に娘のりん(14)の髪結いを頼まれるが、りんの髪の長さはワケあって結髪を結えるほどの長さがない。りんの不憫さと、純粹でたまに抜けている恭介に心を惹かれてしまったきぬは、高価なカステラを食べたい欲も相まって、どうにかしてあげたいと思うも女の髪型は結髪が唯一であるためどうしようもできずに悩む。そんな折、きぬは同じ女髪結いでもある母かや(45)の逆鱗に触れて、罰として長髪をバツサリ切られてしまう。女の命を失って絶望するきぬであったが、髪が短くなったことで寝る時や洗髪が楽になったことに気が付く。それからきぬは西洋婦人を参考に髪が短くても結える新しい髪型を考案して、りんの髪を結う。その髪型は町中の話題を呼び、女性たちの間であつという間に広がっていく。調子に乗りまくるきぬだが、きぬの髪型をハレンチと反発する者も多く、ついには東京府により「婦人断髪禁止令」が出てしまい、きぬは手も足も出なくなってしまう。一方、恭介が政府高官の暗殺計画に関わっていることを知ったきぬはりんと共に止めようとすることも、恭介の抱えた武士の苦しみを救うことができずに苦しむ。凶刃を政府高官に向ける恭介。しかし居合わせた愛人がきぬの髪型だったことで恭介は刀を納める。その後、仲間との斬り合いで重傷を負うも、恭介はきぬの手で髷を切り落とされて武士の人生を終えて、きぬと結ばれる。後日。きぬは断髪禁止令の中でも、りんと一緒に新しい髪型を考えていた。新しい髪型をきぬで試すりん。きぬは自分の髪型を鏡で見つめると、思わず顔を手で覆って赤面するのであった。

【登場人物表】

きぬ（25）	女髪結い
逸見恭介（32）	会津藩出身の士族
りん（14）	恭介の娘
たみ（25）	きぬの幼馴染
喜次郎（22）	きぬの弟・たみの夫
かや（45）	きぬの母親・女髪結い
長吉（49）	きぬの父親・髪結い
永蘭とめ（32）	呉服屋の若女将
吉田武二（36）	会津藩出身の士族
庄兵衛（37）	長吉の客・鋳物師
金次郎（46）	長吉の客・鍛冶師
又七（42）	長吉の客・金具師
新平（24）	長吉の客・郵便配達員
ゆり（21）	とめの奉公人
広瀬道成（32）	カステラ屋店主
はる（12）	裏長屋の娘
関沢博信（39）	明治政府の参議
あき（28）	関沢の愛人
結髪 の 中年 女	
女 1	
女 2	
女 3	

○ 髪結床・きぬの部屋

裏庭に面した四畳半の和室。

鏡台の前に座るきぬ（25）。

きぬの手元にはとき櫛、髪寄せ、元結などの結髪道具。

腰ほどの長さの髪を櫛でといている。

櫛を置くと前髪を元結でくくる。

次に髷を作り、前髪と耳ぎわの鬢と一緒に頭頂部でくくる。

丁寧で流れるような手付き。

まとめた髪を左右に分けて輪にして髷を作る。

筋立てで毛筋を整える。

櫛を乗せて全体を整える。

きぬ「……」

細かいところを確認する。

頬が緩むきぬ。

結髪、唐人髷の完成である。

喜次郎の声「きぬ姉さん。開けるよ」

喜次郎（22）が入ってくる。

喜次郎の髪型は総髪である。

喜次郎「頼まれたの持ってきたよ」

木箱を差し出す喜次郎。

きぬ「よくやりました！」

きぬ、喜次郎から木箱を取って開けると、西洋バサミが入っている。

ハサミを手にして見とれているきぬ。

喜次郎「仏蘭西製です。築地まで行って仕入れてきたんですから、大切に使うように言

ってくださいよ」

きぬ「誰に言うって？」

喜次郎「へっ？ 父さんが使うんじゃ……」

ハサミを手にニヤリと笑うきぬ。

○ 同・表

表通りに面した小さな髪結床。

「うきよ」の看板が付いている。

○ 同・店内

客は表に向いた上がり框に座って髪を

結う作りになっている。

きぬ、西洋バサミを手に満足な表情。

きぬの前に座る喜次郎は、仕上りの悪い散切り頭になっている。

喜次郎、髷がない頭に触れて。

喜次郎「……」

きぬ「喜次郎の友達、みんな連れてきてちょうだい。私が散切りにしてあげるわ」

喜次郎「そんなことしたら、友達がいなくなります！」

きぬ「御上が散切りにしろって言ってるのよ。

今のうちに鍛錬しとかないと……。ここも

う少し切ろうか」

喜次郎「坊主にする気ですか！」

きぬ「どうせまた生えてくる！」

逃げる喜次郎を追い回すきぬ。

かや（45）が入ってくる。

かやの髪型は丸髷。

手には結髪道具入れ。

喜次郎「母さん！ 見てくださいこれ！」

かや「……。喜次郎？」

喜次郎「息子の顔を忘れないでください！」

かや「ひどい出来ね。誰がやったんだか」

きぬ、ハサミを後ろ手に隠して知らぬ存ぜぬ。

かやがきぬからハサミを奪う。

きぬ「ああ！ 仏蘭西！」

かや「客が一人もないからって、女髪結いが男の髪をやるもんじゃありません！」

かやが奥に消えていく。

きぬ「けっ！ けっけっけっ！」

たみ（25）が入ってくる。

たみの髪型は銀杏返し。

たすき掛けにした着物に前掛けを付けた商人の装いである。

たみ「きぬ。うちの人来てない？ 仏蘭西の

ハサミ届けてくるって行ったきり……」

たみ、散切り頭の喜次郎と目が合う。

たみ「どちら様？」

喜次郎「でしようね！」

「たみ、喜次郎の散切り頭をポンポンと叩いて耳を近づける。」

喜次郎「たみさん？」

きぬ「どう？ 何か聞こえた？」

たみ「うん。明治明治って聞こえる」

喜次郎「笑い転がるきぬとたみ。」

喜次郎「二人も散切り頭になればいいんです！ 大きな頭乗せてないで！」

きぬ「笑い止まるきぬとたみ。」

喜次郎「へっ？」

きぬ「喜次郎」

喜次郎「はい？」

きぬ「それはない！」

たみ「ないない！」

「たみ、喜次郎の頭を叩く。」

「笑い転がるきぬ。」

○メインタイトル「かほはゆし！」

○神田の町並み

季節は冬。

神田神社（神田明神）に参拝する人々。

神田川を行き交う船。

にぎわう青物市場。

町は未だに江戸の色を残している。

士族の男の腰には大小。

男たちの多くは髷を結っており、散切り頭はごくわずか。

女たちはみな伝統的な結髪である。

○髪結床・きぬの部屋（朝）

きぬが寝ている。

髪は結髪のまま。

横向きで箱枕に首を乗せている。

きぬ「うう……」

きぬ「おもむろに首をほぐす。」

きぬ「……」

頭皮を搔く。

頭皮を搔く。

頭皮を搔く。

頭皮を搔く。

さらに搔く。
飛び起きる。

きぬ「だあ！」

きぬ「もうざしで髪の中を掻きむしる。」

きぬ「もうもうもうもう！」

きぬ「コバエが飛んで来る。」

きぬ「もうもうもうもう！」

きぬ「コバエがきぬの髪の中に入っていく。」

きぬ「へっ？」

きぬ「髪の中でコバエが動くのを感じる。」

きぬ「ひいひい！」

○同・縁側

裏庭に面した縁側。

きぬがお湯の張られた大きなたらいで、
腰まである長い髪を洗っている。

大量のうどん粉をお湯に追加。

さらに洗っていく。

長吉（49）がやってくる。

長吉の髪型は小銀杏である。

長吉「そんなにうどん粉を使わないでくれよ。」

きぬ「最近何もかも値上がりしてかなわないんだ」

きぬ「父さんがその分働けばよいのでは」

長吉「昔から髪結いの亭主とはよく言ったも

のだけだな、髪結床は木戸の見張りも兼ね

ていて、じいちゃんの家斉公のときにお尋

ね者を何人も捕まえて」

きぬ「たらいのお湯を長吉にかける。」

長吉「熱っ！俺をうどんにする気か！」

きぬ「去って行く長吉。」

きぬ「もうもうもうもう！」

きぬ「髪を洗う手が乱暴になる。」

○同・店内

食べ終わって空になったそばのお椀。

長吉が舟をこいでいる。

庄兵衛（37）が入って来る。

庄兵衛「長吉さん。おい！起きろって！」

長吉「なんだよ。今、將軍様の鬘結ってたところだったのに」

庄兵衛「寝ぼけてねえで早くやってくれ」

床に座る庄兵衛。

長吉「よし。いっちゃやるか！」

○同・縁側

きぬが洗い終わった髪を絞っている。

滴り落ちる大量の水。

冷たい風が吹いて、くしゃみをする。

○同・店内

長吉「長吉、庄兵衛の鬘を結び終わる。」

長吉「はい。お疲れさん！」

奥では金次郎（46）と又七（42）が将棋をしている。

長吉「おい、鍛冶屋！ お前の番だ」

金次郎「待て。今いいとこだ！」

駒を指す金次郎。

金次郎「どうだ！ 手も足も出ねえだろ！」

駒を指し返す又七。

金次郎「なっ！ もう一遍だ！ もう一遍！」
欠伸をする長吉。

○同・縁側

きぬが髪を乾かしている。

手拭いで髪を叩くも、手拭いはしっかり濡れて全く乾いていない様。

○同・店内

将棋中の金次郎と又七。

盤を覗いている長吉。

盤上は金次郎が追い込まれている。

新平（24）がやってきて床に座る。

長吉「十分。いや五分待て」

新平「長吉さん、俺散切りにしようかと」

驚いて振りむく一同。

金次郎、その隙に駒を動かす。

長吉「元には戻れねえぞ」

新平「郵便屋になるなら散切りにしろと。や

っ
てくれ」

長吉が和バサミを取り出す。
盤上に目線を戻す又七。

又七「ん？」
口笛を吹いてごまかす金次郎。

○同・きぬの部屋
きぬが鏡面の前に座り、髪をといて油を付けている。

○同・店内
長吉、金次郎、又七が息を呑んで見つめている。

新平が散切り頭になっている。
長吉「意外と似合ってるじゃねえか」

泣きだす新平。

長吉「……」

将棋の盤上では、金次郎の王将が完璧に囲まれている。

金次郎「今日はここまでにしてやる！」

又七「長吉さん。こいつも散切りにしてくれ」
金次郎「へっ？」

○同・きぬの部屋
きぬが鬘を作っている。

手元から落ちる元結。
髪を手で押さえながら、足で元結をとろうとする。

きぬ「ぬう……」
無理した体勢でバランスを崩して、まとめていた鬘も崩れる。
崩れた自分の髪を鏡で見て呆然とする。

○同・店内
散切り頭の金次郎。

ひどく落ち込んでいる様子。

長吉、又七、新平が後ろから見ている。
又七「団子食うか？」

○同・きぬの部屋

きぬ、まとめた髪を左右に分けて輪にして髷を作る。

○同・店内

長吉、金次郎、又七、新平が串団子を食べながら、散切り頭を叩いては笑い転げている。

○同・きぬの部屋

きぬ、頭に櫛を乗せてようやく唐人髷ができる。

そのまま力尽きるきぬ。

長吉が皿に乗せた串団子を持って来る。

長吉「きぬ。又七さんが団子買ってきてくれたぞ！ お前も食べるだろ？」

部屋の淵に足を引っかけける長吉。

飛んでいく串団子。

きぬの頭に乗っかる。

きぬ「ん？」

鏡を見るきぬ。

きぬ「……」

長吉「こ、これもクシには違えねえてか！」

そそくさと部屋を出て行く。

きぬ、引きつった表情で頭から串団子を取るとそのまま食べる。

長吉が戻ってくる。

長吉「きぬ。お客さんだ。永蔭屋とこの」

きぬ「永蔭屋？」

長吉「髪結いを頼むと。若女将の」

きぬ「とめさん？ とめさんは母さんが」

長吉「そうか。なら今日は帰ってもらうか」

きぬ「……。いえ。私が行きます」

長吉「それはいけねえ。母さんの客だろ？」

きぬ「私が行きます！」

きぬ、残りの団子を一口でほおぼる。

○永蔭屋・表

立派な店構えの老舗呉服屋。

○同・廊下

ゆり（21）に続いて、きぬが歩いてくる。

手には結髪道具入れ。

ゆり「奥様。髪結いの方をお連れしました」

とめの声「どうぞ」

きぬ「失礼いたします」

ふすまに手をかける。

とめの声「かやさんじゃないの？」

きぬ「かやの代わりで参りました。娘のきぬと申します」

とめの声「お帰りください」

きぬ「はい？」

とめの声「お帰りください」

きぬ「母は今、腰をやっています。団子を買
いに行った途中で犬に追いかけて。団
子を取り返した拍子に」

とめの声「お帰りください。私の髪はかやさ
ん以外に触れさせたくございません」

きぬ「……」

○カステラ屋・表

店先に並ぶカステラ。

きぬが羨ましそうに見つめている。

手持ちの巾着袋を振る。

明らかに銭の少ない音が鳴る。

きぬ「はあ……」

洩々と立ち去る。

逸見恭介（32）がやってくる。

恭介の髪型は総髪で刀は落とし差し。

所々で会津弁が抜けていない。

恭介「一づ頼む」

不機嫌な様子の店主、広瀬道成（32）。

広瀬「五十銭」

恭介「……四十銭」

広瀬「田舎に帰れ。三一が」

恭介、広瀬を睨むも広瀬も引かない。

きぬ「……あっ！」

きぬ、すかさず割り込んで。

きぬ「私、十銭お出しいたします！」

恭介「は？」

きぬ 「ですから！ 十銭分だけ私に……」
きぬ 「し、失礼いたしました！」

慌てて結髪道具を落とす。
地面に櫛や鋏、篋などが散らばる。
急いで道具をかき集めるきぬ。
見上げると恭介がきぬを見ている。
愛想笑いするきぬ。
恭介が何かに気が付いて去っていく。
きぬ 「ん？」
近くを邏卒たちが通り過ぎる。
氣にすることなく店を後にするきぬ。
恭介が離れたところから見ている。

○路地

きぬが串団子を食べながら歩いている。
大きくため息をつく。
最後の一個を口に入れると、串を放り
捨てる。

串が前に立っている恭介の刀に当たる。
きぬ 「あっ……」

恭介 「……」

きぬ 「えへえ……。では」

そのまま去ろうとするきぬ。

恭介 「ついて来い」
歩き出す恭介。

きぬ 「……」

恭介 「ついで来い。そう申したはずだが」
きぬ 「きぬ、口の中の団子を飲み込んで」
きぬ 「へえ……」

○裏路地

裏長屋が並んでいる。

きぬが恭介の後ろを歩いていく。
静かに頭のかんざしを抜き取る。
恭介が後ろを振り返る。

きぬ、愛想笑いをして自分の頭を掻く。
長屋の前で恭介が止まる。

恭介 「入れ」
きぬ 「か……」

恭介「か？」

きぬ「買うべしや六文あらばカステラを……」

恭介「……髪結いを頼みたい」

きぬ「……はい？」

恭介「髪結いだろ。おめ」

きぬ「私は女髪結いなので殿方は」

恭介「誰が俺の髪結えと言った」

○恭介の家・内

一間の狭い室内。

陽があまり差しておらず薄暗い。

恭介に続いてきぬが入ってくる。

部屋の隅の暗闇に、りん（14）が座っているのがかるうじて見える。

恭介「りん。髪結いと呼んだ。やってもらいなさい」

戸口で立ち尽くしているきぬ。

恭介「何してる」

きぬ「へえ！」

慌てて部屋に上がって部屋を見渡す。

きぬ「あのお、鏡台は？」

恭介「江戸には越してきたばかりでな」

きぬ「さようですか……」

恭介「まだ何かあるのか？ 女の結髪は分か

らぬ。あとは任せる」

きぬ「殿方がおられては」

恭介「……」

出て行く恭介。

戸を閉めると部屋が一層暗くなる。

きぬ「し、失礼いたします」

部屋の窓を開けるきぬ。

陽が差し込むとりんの姿が見える。

りんの髪は肩くらいの長さしかない。

きぬ「……」

○同・表

恭介が立っている。

きぬ「家が家から出てくる。」

恭介「全然足りませぬ！」

恭介「金か？ まだ渡してなかったな」

きぬ「髪でございます！ あの子の髪の長さでは髪は結えませぬ！ 結髪にされるなら一年もしくは二年ほど伸ばさなくては」

恭介「急いでいる。どうにかしろ」

きぬ「どうにかしろとおっしゃられましても。今日は付け髪を持っておりませぬゆえに」

恭介「付け髪だと！ この馬の骨か髪か知らぬものを娘の頭に？」

きぬ「髪は朝顔の蔓ではございませぬので」

恭介「髪結いなら、こううまくやってくれ」

きぬ「坊主に髷が結えますか？ 結えるならば見てみようございます！」

恭介「おめ。俺を侮辱すんのが？」

きぬ「いやああああ！」

一目散に逃げていくきぬ。

○同・内

りんが座っている。

表では恭介が静かに刀から手を離すのが見える。

りん「……」

部屋にきぬの結髪道具が残されている。

○永園屋・表

きぬが走って来る。

後ろに恭介がいないことを確認すると立ち止まって、肩で息をする。

きぬ「これだから侍ってのは！」

どよめきが起きる。

きぬ「？」

永園屋から、永園とめ（32）が出てくる。

とめの髪型は立派な高島田。

とめの姿に客たちが沸いている。

続いかやが出てくる。

とめ、丁寧な頭を下げてかやを見送る。

きぬ「……」

店に戻っていくとめ。

客たちがわんさかとめに付いて行く。

かや、きぬに気が付いて。

かや「犬に団子食べられて腰やったのはあなたでしょ？ 人の客を奪おうだなんて百年

早いのよ」

きぬ「私も今しがたお客のところへ、髪結いに行つて参りましたところですので！」

かや「何も持たずにかい？」

きぬ「……。ああ！」

きぬ「……。去つていくかや。」

きぬ「……。きぬ、後ろを振り返る。」

○ 恭介の家・表

きぬがかんざしを構えてやつてくる。

きぬ「……。聞き耳を立てて家の中を探る。」

きぬ「……。そつと戸を開いて中を覗く。」

畳に散らばるきぬの結髪道具。

きぬ「……。りんが櫛で髪をといているのが見える。」

きぬ「……。ちよいとちよいと！」

○ 同・内

きぬが入つて来る。

驚くりん。

きぬ「……。きぬ、りんから櫛を取り上げて。」

きぬ「……。これで何本団子が食べられると……」

櫛に大量の髪の毛が付いていることに気が付く。

きぬ「……。きぬ」

りんの髪を見ると乱暴に切られたよう

で、毛先がバラバラである。

きぬ「……。きぬ」

きぬ「……。きぬ」

きぬ「……。きぬ、りんの後ろに立つて和バサミで毛先を切りそろえていく。」

○ 同・表

恭介がやつてくる。

戸に手をかけるが中の気配に気が付く。

○同・内

きぬ「きぬがりんの髪に油を付けている。試みに束ねて髷を作ってみるが、明らかに長さが足りない。」

きぬ「……」

○同・表

きぬ「家が家から出てくる。手には結髪道具入れ。」

恭介「……。俺がやる。」

きぬ「あの子の髪はここ最近切られたものでございまして。それも髪結いではない者の手で。」

恭介「……。俺がやった。仕方なか……」

きぬ「女がああ髪で天道様の下を歩けるとお思いとでも！」

きぬ「きぬ、恭介に詰め寄りながら。」

きぬ「いかなることがあっても女の髪を切り落とす所業、決して許しませぬ！ 私は江戸は神田、安永から続く髪結いの家の女でございまして！ たえこの身が斬られようとも、女の髪には命を賭けさせていただきます！」

○同・内

りん「きぬの櫛を手に入れている。髪は一本にきれいに束ねられている。」

○同・表

きぬ「きぬと恭介。」

きぬ「では！」

去ろうとするきぬ。

恭介「りんが江戸に入るためには仕方なかった」

きぬ「……。はい？」

恭介「栗橋の関所がなくなっていたとは」

きぬ「……。江戸から出て行く時です。江戸が

女に敵しいのは。それと関所はとつくに」

恭介「だから知らなかったと申しておる」

きぬ「浅葱裏？」

恭介「なんて？」

きぬ「いえいえ何も！」

恭介「きぬに頭を下げる。」

きぬ「！」

恭介「俺の無知が招いたことであるのは重々分かっておる。あの髪では、りんが外を歩くことができぬことも。無理したことを強いてしまい申し訳なかった。ならぬものはならぬ。悪かった」

きぬ「……」

恭介、きぬの横を通って家に入ろうとする。

きぬ「……何か臭いに気がつく。」

恭介「……カステラ？」

恭介「？」

きぬ「カステラの臭いがします」

恭介「おめの鼻は犬か？」

恭介「恭介が懷からカステラを出す。」

恭介「上野では四十銭だった」

きぬ「……。どうにかできるかもしれませぬ」

恭介「何がだ？」

きぬ「娘さんの髪です。あの長さでも立派な結髪を結つてさしあげられます！」

恭介「先ほどは坊主に髷は結えぬと」

きぬ「私は江戸は神田、安永から続く髪結いの家の女でございます！」

恭介「それはさつき聞いた」

きぬ「きぬと申します！」

恭介「……。逸見恭介だ」

きぬ「逸見様。では五十銭で承りましょう！」

恭介「五十銭！ 髪結いは男でも二十五銭と。」

女はもつと安いと」

きぬ「ここは東京でございます。物の値も上がっておりますゆえ」

恭介「五十銭……。カステラと一緒にか」

きぬ「へえ」

愛想笑いのきぬ。

恭介「……。分かった。頼む」

きぬ「はい！ では今日のお代を！ そちら

を少々分けて……」

恭介「明日また来い」

恭介、家に入っていく。

きぬ「……」

○小間物屋・表

路地に面した表長屋。

店頭には生活雑貨が並んでいる。

きぬが行き交う女たちを見つめている。

きぬ「島田髷、丸髷、先笄、つぶし島田、三つ

輪、唐人髷、桃割れ、櫛巻き、高島田、島田

くずし……」

たみがやってくる。

たみ「お嬢ちゃん。何も買わないなら帰って

もらえないかい？」

きぬ、たみを見て。

きぬ「銀杏返し」

たみ「あら。今度は奴島田にしてもらおうか

しら」

きぬ「……」

たみ「またお母さんと喧嘩したの？ それで

こうなったら新しい結髪を生み出して、黙

らせてやろうと？」

きぬ「あんたすごいね。半分はあつてる」

たみ「いいわよ、きぬ。私がいくらでも人形に

なつてあげるわ！」

きぬ「たみ……」

笑顔のたみ。

○同・たみの部屋

たみが鏡台の前に髪を下ろして座って

いる。

きぬが後ろに立つ。

たみ「きぬの悩みは私の悩み。喜次郎までも

らつちやつたし、これくらいは」

きぬ「たみ。本当にありがとう」

たみ「いいってこと！」

きぬ、たみの髪を束ねて。

きぬ「いざ！」

肩くらの長さに西洋バサミを構える。

たみ「待て待て待て待て！」

逃げるたみ。

たみ「なんてモノ持つてるのよ！」

きぬ「なんてって？ 仏蘭西製よ」

たみ「髪を切るとは聞いてない！」

きぬ「髪が短くても結髪ができるか試すのよ」

たみ「そんなのできるわけないでしょ！」

きぬ「私の悩みは、たみの悩みでしょ！」

たみ「私の髪は私のものよ！」

きぬ「お願い！ 団子おごるから！」

たみ「カステラでも嫌だ！」

きぬ「ちよっとだけ！」

たみ「いやあああ！」

逃げるたみ。

追いかけるきぬ。

恭介の声「おい！ 誰かいらないのか！」

たみ「はい！ きぬ、あんた行ってきて！」

きぬ「なんで私が！」

たみ「この髪で表に出られると？」

きぬ「喜次郎は？」

たみ「知らないわよ！」

恭介の声「いないなら盗っていくぞ！」

たみ「きぬ！」

きぬ「ああもう！」

○同・店内

きぬ「きぬが慌てて奥からやってくる。」

きぬ「はいはい！ お待たせいたし……」

恭介がいる。

きぬ「あああ！」

恭介「おめ、髪結いじゃなかったのか？」

きぬ「中でうるさいタヌキの髪を結っていた

のでございます！ ご用は？」

恭介「油あるか？」

きぬ「油？ 油売りならそちらの角を」

恭介「髪に付けるヤツだ。女のは分からねえ。

おめが選んでくれ。あと鏡台はあるか？」

きぬ「鏡台でございますね」

きぬ「きぬ、思わず頬が緩む。」

恭介「なんだその顔は」

きぬ「なんでもございませぬ」

きぬ「奥に向かつて。」

きぬ「たみ！ 鏡台つてある？」

かやの声「手配するつて伝えて！」

きぬ「だそうです」

恭介「それより娘の髪結いはいつになる。もう五日も過ぎてゐるぞ」

きぬ「えっと……。そのうち伺います！」

恭介「そのうちでは困る」

きぬ「そのお……。やはりなのですが、結髪にするには付け髪が必要かと……」

恭介「だから付け髪は」

きぬ「どこの馬の骨か髪がとおっしゃるなら、身元が分かる髪ならばよろしいですよね！」

○同・たみの部屋

たみが鏡台の前で髪を結つて決め顔を
している。

きぬが入ってくる。

たみ「？」

○同・店内

恭介が待っている。

きぬがたみを引つ張つて来る。

きぬ「お待たせいたしました！ どうぞ、お好きなところからお切りください！」

たみ「へっ？」

たみ、恭介の刀を見て。

たみ「ぎゃあああ！ どうかご慈悲を！」
必死に頭を下げる。

たみ「このきぬと言う者は昔から意地が悪く、

特に食い意地は閻魔様も呆れるほどござ

います！ お侍様にどのようなご無礼を働

いたかは存じ上げませぬが、私が身代わり

とはあまりにもでございます！ 何とぞご

慈悲を！ どうかご慈悲を！」

きぬ「斬り捨てていただけます？」

恭介「あのなあ……」

喜次郎の声「たみさんから離れろ！」

喜次郎が物干し竿を構えている。

喜次郎「聞こえねえのか！　クソ侍！」

たみ「あんた！」

きぬ「喜次郎！　これは色々と！」

震える喜次郎の手足。

対する恭介は微動だにしない。

喜次郎がしびれを切らして上段の構え

から踏み込む。

喜次郎「きえええ！」

恭介、一気に間合いを詰めると喜次郎

の小手に拳を振り下ろす。

喜次郎「痛だあ！」

物干し竿を落として地面に転がる。

恭介「お前が勝手に転んだ。それでよいな」

喜次郎「……へえ」

恭介「きぬ殿」

きぬ「へえ！」

恭介「どうか娘を頼む」

頭を下げる。

呆然とするきぬ、たみ、喜次郎。

去って行く恭介。

たみ「たみ、喜次郎に抱き付いて泣き出す。

勝てるわけないでしょ！　あんたがお侍に

喜次郎「……」　　バカ！」

きぬは遠ざかる恭介の背中を見ている。

○髪結床・きぬの部屋（朝）

きぬが寝ている。

相変わらずの箱枕。

寝返りの拍子に枕から落ちる。

きぬ「だあ！」

鏡台に油壺が置いてあるのが見える。

きぬ「……」

○恭介の家・内

りんが部屋の隅にいる。

きぬの声「ごめんください」

きぬが戸を開ける。

きぬ「あがつていい？」

りん、小さくうなづく。

部屋に上がるきぬ。

りん、油壺を見せる。

きぬ「私の余りだけ。あげるわ」

りん「……」

きぬ、りんの髪を整えながら。

きぬ「鏡台は弟にお願いしたから。うちの弟、一年前に小間物屋やってる私の幼馴染と一緒に前になつてね。髪結いになろうとはしてたんだけど、筋立てで客の耳刺しちやつて」

りん「……」

きぬ「東京はどう？」

りん「……」

きぬ「近頃はまた物騒でね。新しい政府に不満を持つ輩が政府高官を狙つてるとか狙つてないとか。床に来る男たちが、ああだこうだと噂話ばかりしてて」

りん「……」。父はもう人を斬りませぬ」

きぬ「ん？ 何？」

りん「……」

きぬ「まあ私は私の仕事をするだけですけどね。できました！」

きぬが手鏡をりに渡す。

きぬ「りんの髪型が稚児髷になつていてる。」

きぬ「元服がまだならこれでも」

りんが髷を乱暴にとく。

顔が引きつるきぬ。

○神田神社・境内

きぬがぐったりと座っている。

近くでは裕福そうな若い女がカステラをちぎって雀にあげている。

きぬ「……」

去って行く若い女。

きぬ、カステラをつまむ雀を足で追ひ払う。

きぬ「あんたには百年早いわ！」

とめがゆりを連れて歩いてくる。

とめは相変わず完璧な高島田。

ゆりはカステラの包みを抱えている。

きぬ「あ、先日は……」

無言で一礼するとめ。

笑顔はない。

そのまま去って行く二人。

とめを後ろから睨むきぬ。

足元のカステラのカスを集めて、とめに近づく。

きぬ「とめさん。ちよいと乱れておりますよ」髪を整えるふりをしてカステラを頭に乗せる。

満面の笑みのきぬ。

きぬ「では、ごきげんよう」

何事もなく去って行くとめとゆり。

きぬ、ため息を一つ漏らして、とめとは逆の方へ歩き出す。

とめの声「きやああ！」

振り返るきぬ。

とめの頭を雀が突いている。

ゆり「奥様！ 奥様！」

ニヤリときぬ。

きぬ「へへ……ん？」

カラスがやってきて、とめの頭を突く。

ゆりがカラスを追っ払おうとするも、

カラスは負けじととめの髪を突く。

慌てるも何もできないきぬ。

カラスに突かれたとめの髪がごっそりと落ちる。

呆然とするきぬ。

とめ、落ちた髪を見て。

とめ「い、いやああ！」

かやがやってきて、とめの頭を風呂敷で覆う。

きぬ「……」

かや、落ちた髪を素早く懐に入れて。

かや「お屋敷へ。私もすぐに参ります」

ゆりがとめを連れて足早に去って行く。

かやがきぬの方へやってくる。

きぬ「母さん。これは……」

かや、きぬを思いつきり平手打ちする。

去って行くかや。

きぬはその場から動けない。

○ 髪結床・裏庭（夜）

きぬが猿ぐつわされて、木に縛り付けられている。

長吉が慌ててやって来る

長吉「何をしたんだ！ きぬ！ 教えてくれぬと、俺だって庇えるものも庇えぬぞ！」

長吉「きぬ！」

かやがやってくる。

長吉「母さん！ この子は何をした！ そりや昔からイタズラってのはたくさんあったが、これはあんまりだ！」

かや「二人にして」

長吉「へえ……」

力なく去って行く長吉。

かや、きぬに近づいて。

かや「客には秘め事がある。とくに女には。だから女髪結いは床を構えず客の家を回る」

きぬ「……」

かや「とめさんは髪が伸びにくくてね。付け髪をしていただけ、それを好まぬ輩もいる。でも、呉服屋の若女将として美しく長い結髪でないことは許されないことで」

懐から小刀を出す。

きぬ「！」

かや、きぬの鬘を切り落とす。

きぬ「んぐ！」

かや「あんたを髪結いにするんじゃないかった」
去って行くかや。

きぬの足元は長い黒髪が落ちている。

○ 同・きぬの部屋（夜）

きぬが入ってくる。

鏡を見ると、髪が肩ほどの長さになった自分の姿が映る。
泣き崩れるきぬ。

○ 恭介の家・表（夜）

恭介がやって来る。

戸に手をかけようとする、気配を感じて振り返る。

吉田武二（36）が路地の角に立っている。

恭介「……」

恭介、武二の元へ歩き出す。

○同・内（夜）

りんがいる。

表にいた恭介の影が消える。

○髪結床・きぬの部屋（夜）

きぬが横になっている。

枕はいつもの高枕。

まだ涙は止まっていない。

高枕から頭が落ちる。

きぬ「ん！」

高枕を壁に放り投げる。

枕なしで寝ようとするも頭の位置が決まらない。

座布団を折り曲げて枕にする。
きぬの泣き声が静かに響いている。

○神田の町並み（朝）

陽が昇っていく。

神田神社参拝する人々。

神田川を行き交う船。

青物市場に品を並べる商人。

○髪結床・きぬの部屋（朝）

寝ていたきぬが目覚める。

きぬ「……」

起き上がった大きく伸びをする。

髪が短くなっていることを確かめると
ため息を漏らす。

きぬ「……ん？　んん？」

首を回すが何も感じない様子。

きぬ「あれ？」

○同・店内

長吉がいる。

かや「では行つて参ります」

長吉「母ちゃん……」

かや「結髪が結えるくらいに髪が伸びる頃には頭も冷めてるでしょう」

長吉「……」

出て行くかや。

入れ違いで庄兵衛が入つて来る。

庄兵衛「はん？ 夫婦ケンカでもしたのか？」

長吉「うるせえ！ 坊主にすっぞ！」

○同・縁側

きぬがお湯の張られた大きなたらいに少量のうどん粉を入れてかき回す。腰をかがめて髪をたらいに付けようとするが、髪が短くて届かない。

きぬ「ふん！」

たらいに頭ごと入れて髪を洗う。

きぬ「ぷはあ！」

頭を振つて水を切る。

○同・店内

長吉が庄兵衛の髪を結び終わる。

長吉「はい。ご苦労さんです」

庄兵衛「どうも」

銭を渡して去つて行く。

長吉「きぬのいる奥が気になる。」

長吉「……ん？」

又七が表から覗いている。

長吉「どうした又七？」

又七の髪型が散切りになっている。

長吉「おめえ……」

又七「長吉さん。悪い。金次郎の野郎が散切りが楽だつて余りにも言うもんだから」

長吉「……やるか？」

長吉、将棋を指す身振りをする。

○同・縁側

きぬが縁側に座っている。
きぬ「：。乾いた！」

○同・店内

長吉が又七と将棋をしている。

又七「よしっ！すでに終盤である。」

長吉「：。参りました」

又七「よっしゃ！頭軽くなった分、脳みそも回るもんだな！」

笑う又七。

長吉「：。」

たみが慌ててやってくる。

たみ「きぬは！」

長吉、奥を指す。

たみ、一目散に駆け出す。

○同・きぬの部屋

たみがやってくる。

たみ「きぬ！あんた何をして：。」

きぬ「うほほーい！うほほーい！」

たみ「きぬ：。」

きぬ「たみ！おはようさん！ああ！な

んて素晴らしい朝なのかしら！まだ昼に

もなっていないわ！」

たみ「元からだったけど、ついに頭いっちま

ったかい」

きぬ「そう！頭！頭がとにかく軽いの！

寝ても首が痛くない！さつき洗ってもう

乾いた！うひゃあ！」

小躍りが止まらない。

たみ「髪結いがそれでどうするの！結髪が

できないじゃない！」

きぬ「だからさ、無理して結髪にすることな

るてなかったのよ！これから女も散切

りよ！」

たみ「散切り？女がかい？」

きぬ、自分の頭をポンポンと叩く。

○築地・外国人居住地

西洋人が多く行きかっている。

きぬとたみが、建物の陰から西洋婦人
たちを観察している。

きぬは頬かむりで髪を隠している。

たみ「西洋人ってみんな背高いよね。何食べ
たらあなるのかしら。牛？」

きぬ「きつとカステラよ。それよりも、あの髪
型なら長さがなくてもいけそうね」

たみ「でも日本の女に似合うかは」

きぬ「どうやって結ってるか聞いてくる」

きぬ、西洋婦人たちの元へ。

たみ「きぬ！」

きぬ「へー！ アイム・ジパング・バーバ
ー！ オーケー！ ユア・ヘアー！」

西洋婦人たちの髪型を指さして、身振
り手振りで聞いている。

首を傾げる婦人たち。

きぬ「プリーズ・ユア・ヘアー！」

○髪結床・きぬの部屋（夜）

きぬが鏡台に向かって髪を結っている。

手元には西洋婦人たちの髪型が描かれ
た紙。

髪を三つ編みにしようと試みるが、失
敗してぐちゃぐちゃになる。

○同・表

長吉が正月の門松を置いている。

通りを行き交う人たち。

女たちは変わらずの結髪。

男たちは散切り頭が目立っている。

長吉「……」

髪結床に客は一人も誰もいない。

○永園屋・とめの部屋

部屋の中には立派な着物が掛けられ、
たくさんの化粧道具や結髪道具が置か
れている。

かやがとめの髪を結っている。
付け髪をつけて整えていく。

○髪結床・きぬの部屋

きぬ、三つ編みに束ねた髪を丸めて頭に
乗せる。
鏡の自分を見つめるきぬ。

きぬ「……うげっ」
髪をほどく。

○恭介の家・内

りんが鏡台の前で、きぬからもらった
櫛で髪をといている。
ふと戸口の方を見る。
誰もいない。

○宿屋・廊下（夜）

各部屋からは、どんちゃん騒ぎが響い
ている。
恭介が酔っぱらいを避けて歩いていく。
奥の部屋の戸を開ける。
中では武二をはじめ、髻を結った男た
ちがひざを突き合わせている。

恭介「……」
恭介、部屋の中へ入っていく。

○神田神社・境内

巫女たちが正月飾りを片付けている。

○髪結床・きぬの部屋

きぬが三つ編みにした髪を後ろでまと
める。
鏡を見つめるきぬ。

きぬ「……」
たみがやってくる。

たみ「きぬ！ あのお待さんがうちにやって
きて、きぬを呼んでくれと……」

たみ「できたんだね」
きぬの口元が微笑む。

○小間物屋・表

恭介が立っている。

喜次郎は恭介を睨んでいる。

恭介は気にしていない様子。

きぬの声「逸見様。お待たせいたしました」

恭介「何をしておった！ 年が明けたぞ！」

頬かむりをしているきぬ。

恭介「どうした。それは」

きぬ「お気になさらず。では参りましょう」

恭介「参る？ どこにだ？」

きぬ「どこに？ りんさんの髪結いのために

私をお呼びしたのでは？」

恭介「ああ……」

二人が並んで去って行く。

二人の背中を見送るたみ。

かや「なんていうか、なんていうかだわ……」

喜次郎がいない。

かや「あれ？ 喜次郎くん？」

○恭介の家・内

薄暗い中にりんがいる。

その手には櫛。

気力なく壁にもたれている。

戸口が開いて陽が差し込む。

りん「？」

きぬが立っている。

○同・表

恭介が一人立っている。

中が気になり、ウロチョロと落ち着か

ない様子。

陰から何者かが恭介を伺っている。

○同・内

きぬが鏡台の前でりんの髪をといてい

る。

りん「ならぬものはならぬでございます。た

かが髪ですの待てばそのうちに」

きぬがりんの髪を三つ編みにしていく。

きぬ「明治の世になって江戸は東京に。私たち庶民も苗字を使って良しってなったし、今年は鉄道と言うものができるそうです」
りん「テツドー？」
きぬ「馬のいない大きな馬車が陸を走るそうです」
りん「よくわかりませぬ」
きぬ「男のちょん髷も散切り変わった。女だって変わって良かったのよ」
りん「……」

○同・表

恭介が立っている
陰に隠れた何者かが木の棒を倒す。
身構える恭介。

喜次郎が出てくる。

恭介「お前……」

喜次郎「……」

恭介に向かって歩いていく。

○同・内

きぬがりんの髪を仕上げていく。

○同・表

恭介と喜次郎が対峙している。

恭介「きぬ殿なら髪結い中だ。しばし待て」

喜次郎「逸見殿に用があつてきた」

恭介「はっ？」

○同・内

きぬがりんの髪に手柄をリボンの形に結ぶ。

きぬ「どう？」

鏡の中の自分を見つめるりん。

りん「！」

思わず口元を手で覆う。

きぬ「かほはゆしね」

○同・表

恭介と喜次郎。

喜次郎「逸見殿。俺を……」

恭介「俺を？」

喜次郎「俺を！」

戸口が開く。

振り向く恭介と喜次郎。

りんがうつむきながら出てくる。

三つ編みを後ろで折り返した髪型、後

の「まがれいと」である。

息を呑む恭介と喜次郎。

きぬが出てくる。

きぬ「あれ？　なんで喜次郎がいるの？」

喜次郎が一目散に逃げていく。

きぬ「？」

恭介はりんに目を奪われている。

きぬ「逸見様。女の散切りでございます！」

恭介「もしやきぬ殿も？」

きぬ「私？　私は別に……」

恥ずかしそうに頬かむりを取る。

きぬの髪型は三つ編みを後ろで丸めた

後の「英吉利結び」である。

足早に去って行く恭介。

きぬ「逸見様？」

恭介、井戸で水を頭からかぶる。

きぬ「りんさん。侍には娘の髪結いの後に水

を被る習わしがあるのでしょいか？」

りん「そんな習わしございませぬ」

恭介が派手に水をぶちまけたせいで、

何事かと裏長屋の女たちが出てくる。

女たちがきぬとりに気が付く。

女たちは髪型について話している様子。

りん「陰口でも言われているのでしょうか？」

きぬ「私にはカステラの臭いがします」

りん「カステラ？」

きぬが啖呵を切り出す。

きぬ「さあさあさあ！　寄ってらっしゃい！

見てらっしゃい！」

りん「きぬさん？」

きぬ「箱枕に首を痛めることも、髪を洗って

日が暮れることも、虫に頭をかじられるこ

とも、皆々さようなら！　これが！　ああ、
これが女の散切り頭で候！」

りん「きぬさん……」

きぬ「……しくじったな、こりゃ」

はる（12）がやってくる。

はるは汚れた結髪をしている。

はる「あのお！　私もこれにしたいです！」

りん「きぬさん！」

きぬの口元がニンマリと笑う。

○永蘭屋・表

かやが出てくる。

疲れた様子でため息を漏らす。

前を通った若い女が「まがれいと」の
髪型をしている。

かや「ん？」

別の女は「英吉利結び」で歩いている。

かや「！」

周りを見渡すと、髪を短くして束ねた
髪型（いわゆる束髪）の女たちで溢れ
ている。

○小間物屋・表

たみ「たみが客を見送っている。」

たみ「ありがとうございますあ！」

髪型は「英吉利結び」になっている。

○同・たみの部屋

きぬがカステラを食べている。

満面の笑みで幸福な表情。

たみがカステラをつまみ食いする。

きぬ「ああ！　私のカステラ！」

一口食べて至福の表情。

たみ「人んちで良くもまあ」

きぬ「私、うちでは蟄居だから」

たみ「ねえ。かやさんは、あんたが町中の女の

髪散切りにしてるって知ってるの？」

きぬ「女には秘密があるものよ」

たみ「バレたら島流しね」

きぬ「たみ、またつまみ食い。」
きぬ「食べすぎ！金払えコラ！」
たみ「いやさ。最近いくら食べてもお腹いっぱいにならないのよね」
きぬ「団子食べなさいよ。団子」
たみ「もはや団子には戻れないわ。菓子も髪型も！」
笑い転がるきぬとたみ。

○路上

きぬが歩いている。
「まがれいと」の若い女が笑顔できぬに手を振る。
きぬも笑顔で振り返す。
ゆりが前に立つ。
ゆり「こんにちは」
きぬ「……。あつ、永菌屋の」
ゆり「慌てて髪を手拭いで隠そうとする。」
きぬ「若女将がお呼びでございます」
ゆり「きぬ様をと」
きぬ「……」

○永菌屋・廊下

ゆりがきぬを連れてやってくる。
ゆり「奥様。お連れいたしました」
とめの声「お入りください」
きぬ「し、失礼いたします」

○同・とめの部屋

きぬが入ってくる。
とめが鏡台の前に座っている。
きぬ「とめの髪型は相変わらず高島田である。」
きぬ「あのお……。とめ様の髪結いは母が」
きぬ「とめ様が結髪をといて付け髪を外し出す。」
とめ「何のご縁がありましてか、府中より神田へ嫁入りして参りまして、はじめに神た仕打ちがこれでございます。私の髪が伸

びにくいことは先祖の悪い行いなのでござ
いますのでしょうか？」
きぬ「そんなことは決して……」
とめ「私をその髪型にしてくださいませ」
きぬ「……。よろしくて？」
とめ「よろしくお願いいたします」
きぬ「で、では失礼いたします」
きぬ「きぬがとめの髪を整えはじめる。
きぬ「呉服屋の家はご苦労なさいますね。私
の家の代々髪結いですが」
とめ「誤解なさらないでください。私はその
髪型がかわゆいと思いましたが、したい
のでございます」
頬を緩ませるきぬ。

○同・廊下
かやが走って来る。
ゆりが慌てて追いかけている。
ゆり「かや様！　お待ちを！」

○同・とめの部屋
かや「とめさん！　」
かや「とめの後ろに立つきぬが見える。
かや「きぬ！　あんた……」
きぬ「あ……」
かや「とめさん！　」
とめの髪型が「英吉利結び」になっ
ている。
鏡の中の自分を見つめているとめ。
思わず口を手で覆う。
とめ「かわゆい……」
呆然とするかや。
きぬが安どの表情を浮かべる。

○神田の町並み
神田神社を参拝する人々。
神田川沿いを歩く人々。
青物市場で買い物をする人々。
男は散切り頭が増え、女たちの多くも

髪を短くして結っている。

○ 髪結床・きぬの部屋

きぬが山盛りのカステラを食べている。
至福の表情。

○ 同・店内

長吉が一人にいる。

客は誰もいない。

かやが帰って来る。

長吉「おかえり。早かったじゃないか」

かや「今日は一人だけでしたので」

長吉「こっちは屋前に三人。二人は将棋だけ

して帰ったが」

かや「……」

長吉「こればかりはどうしようもねえ。来る

時が来たんだ」

かや「天保のときのこと覚えてます？」

長吉「髪結いが忘れるワケねえだろ。水野公

め。ひでえことしやがって……。まさかま

たあのお触れが出ると？」

かや「……」

長吉「あれは結髪が贅沢だと言いがかりを付

けられて……。きぬのやつてるとは贅沢

か？ 油を使う量が減ったからむしろ儉約

だと」

かや「新しいものを好ましく思わない輩は、

いつの時代でもいるものです」

長吉「……」

○ 小間物屋・表

きぬ「きぬがやってくる。

きぬ「たみ！ たみ！」

たみ「奥からやつてくる。

たみ「なんだか体が重たそう。

きぬ「犬みたいにわめかないで……」

きぬ「新しいハサミが欲しいんだけど！ ま

た仏蘭西で！ 今度は一番高いのを……」

たみ「うーん。なんか朝から」

きぬ「お医者とは？」
たみ「お店空けられないし」
きぬ「こんな店、誰も来ないわよ」
たみ「金持って嫌な女になつたわね」
きぬ「喜次郎は？」
たみ「朝から出ていったきり」
きぬ「よそに女ができたわね」
たみ「……」
きぬ「冗談だから！　それはないとか言つてもらわないと、私本当に嫌な女に！」
たみ「喜次郎くん。こないだは急に苗字を名乗ろうなんて言いだして」
きぬ「苗字？　武士じゃあるまいし。役所に届けると租税されるわよ」
たみ「それでもやるって」
きぬ「うーん……」
たみ「思えばさ、私に貰い手がないからつて、喜次郎に無理して来てもらったようなものだったじゃない。いろいろ不満もあるのかも」
きぬ「……」

○路上

きぬが歩いている。
きぬの足元に水がまかれる。
きぬ「おわっ！」
桶を持つている結髪の中年女。
中年女「あら。ごめんなさい」
きぬ「……ん？」
喜次郎が裏路地に入っていくが見える。

○裏路地

歩いていく喜次郎。
きぬが後ろから付けていく。
喜次郎がとある裏長屋の前で止まる。
恭介の家である。
喜次郎が恭介の家に入っていく。
きぬ「よそに女！」
きぬ、慌てて恭介の家へ。

○ 恭介の家・内

きぬが戸を開ける。

きぬ「喜次郎！ 姉さんは許さないわよ！」

喜次郎「中には喜次郎と恭介がいる。」

きぬ「りんさんは？」

恭介「りんなら買い物だ」

きぬ「さようで……」

喜次郎「ちょうど良かったです。姉さんにも聞いてください」

きぬ「喜次郎！ わ、私は別に止めないわよ！ たみにも内緒にする！ その道はお侍様の心得の一つとも聞かし！」

喜次郎、恭介に頭を下げて。

喜次郎「逸見殿。小間物屋の喜次郎、改め神田

喜次郎。俺を武士にしてくれ！」

きぬ「武士？ あんたが？ へっ？」

喜次郎「逸見殿にやられて目が覚めたんだ。

俺はあなりてえ。恭介殿みたいな、強い

武士になりてんだと」

きぬ「店はどうするの！ たみは！」

喜次郎「恭介殿は会津から来たと聞いた。俺

は商売がてらいろんなお偉いさんの屋敷に

入ることもあって、あいつらは未だにあん

たらを恐れている。そして、俺もお偉いさ

ん方の横柄さと庶民をバカにした贅沢な暮

らしには腸が煮えくり返っている」

きぬ「喜次郎！ 上野を覚えてないの？ う

ちにいても聞こえてきたわよね？ 鉄砲の

音が。大砲の音が。においもした！ 焼か

れる人の悲鳴も！ あんたはあんなことが

したいワケ？」

喜次郎「武士の勤めならば望むところだ」

きぬ「バカなの？ あんたバカなの！」

恭介「……」

きぬ「逸見様もこのバカをお叱りください！

もう武士の時代は終わったのです！ みな

散切りにしているじゃないの！」

喜次郎「髷は姉さんに落とされちゃったが関

係ねえ。逸見殿。頼む」

再度頭を下げる。

きぬ「いい加減にしなさい！ 逸見様！」

恭介「喜次郎。今しがた、お前の姉貴が武士の時代は終わったと言ったよな」

喜次郎「大変申し訳ない。姉貴に代わってお詫びいたす」

恭介が喜次郎の前に刀を放り投げる。

喜次郎「へっ？」

恭介「町人にナメられたぞ。武士ならこういうとき、どうする？」

喜次郎「……」

目の前の刀に手が震えている。

きぬ「き、喜次郎……」

恭介「武士は誉のためならば身内でも斬る。死ぬことだけが武士道と思うな」

喜次郎「……」

恭介「やれ！ 喜次郎！」

喜次郎「うわあああ！」

家を飛び出していく喜次郎。

力が抜けてぐったりとするきぬ。

恭介「きぬ殿。ちようどよかった。りんが帰ってきたら髪結いをやってくれぬか？」

きぬ、恭介を平手打ちする。

恭介「あいつに人は斬れぬ。分かった」

家を出て行くきぬ。

恭介、刀を手にすると壁に叩きつける。

○路地（夕）

喜次郎が力なく歩いている。

きぬが後ろからやってくる。

喜次郎「俺は姉さんみたいにはなれねえ。女たちの髪を片っ端から切り落として。そんでみんなが笑って」

きぬ「だから武士になりたいと。与太郎もい

いところね」

喜次郎「少なくとも何者かにはなれた」

きぬ「人は斬られたら髪みたいに伸びてこ

いのよ」

喜次郎「……」

きぬ「喜次郎。あんた、たみのこと嫌い？」

喜次郎「そんなことは言っていないだろ！」

きぬ「たみが気にしててね。年増の女を無理してもらつてもらつたつて」

喜次郎「たみさんのことは昔から知ってたから。いつも笑つてて優しくて。姉さんとは全然違つて」

きぬ、喜次郎を蹴つ飛ばす。

喜次郎「姉さんはそれだから未だに独り者なのですよ」

きぬ「たみを泣かせたらこんなもんじゃ済まないから！」

喜次郎「……。ごめんなさい」

きぬ「……」

○小間物屋・表（夜）

きぬと喜次郎がやってくる。

きぬ「今日のことは忘れるから。口固くないと女髪結いはやっていけないし」

喜次郎「……」

たみが奥から出てくる。

たみ「どこほつつき歩いてたのよ。もう！ きぬまで連れて！」

喜次郎「ちよつと用があつて……」

きぬ「たみ。あんた昼倒れそうだったのに。何食べたらずうなるのよ」

たみ「倒れてなんかいられないわよ！ 私が倒れたら、この子まで倒れるじゃない！」

きぬ・喜次郎「はい？」

お腹をさするたみ。

たみ「まあ、そういうことだから！」

きぬ「呆然とたたずむきぬと喜次郎。」

きぬ「喜次郎。あんた、親になるんだね」

泣き崩れる喜次郎。

たみ「なにになにに！ 赤ん坊が泣く前にあんたが泣いてどうするのよ！ もう！ しつかりしてちょうだい！」

きぬの目もどこかうるんでいる。

きぬの頭に小石が当たる。

きぬ「いっ！」

振り返ると、結髪の女たちが足早に去

って行くのが見える。
首を傾げるきぬ。

○髪結床・縁側

きぬが串団子を食べている。
だらしなく気が抜けている様子。

恭介が庭からやってくる。

きぬ「……。逸見様！」

きぬ、慌てて身なりを整える。

恭介「床の親父が裏に回れと」

きぬ「何か御用で？」

恭介「りんの髪結いを頼みたい。それ以外に

おめに用はない」

きぬ「へえ……」

恭介「暇そうだな」

きぬ「この髪型は自分でもできますゆえ、髪

結いは必要ないのでございます」

恭介「ならば、りんもそうさせるか」

きぬ「それだけはお勘弁を！」

恭介「分かっている。表で待つ」

去って行く恭介。
きぬ、残った串団子を急いで食べる。

○路上

きぬと恭介が歩いている。

恭介「実は縁談をしようと思っている」

きぬ「縁談？ そのお年でですか？」

恭介「りんの話だ」

きぬ「ああ。りんさん」

にんまりときぬ。

きぬ「逸見様も父親なのですわね」

恭介「悪いかな？」

きぬ「いえいえ！ しかし、りんさんは元服

をまだされておらぬと」

恭介「縁談が決まったら元服だ。ここらでり

んに合う男はいないか？ 土族の者が良い。

だが長州のヤツはなしだ。薩摩と土佐も」

きぬ「私に土族の知り合いがいますとも？」

恭介「喜次郎ならどうだ？」

きぬ「たみに赤子が出来ましたので、喜次郎

はそれどころではございませぬ」

恭介「そうか。武士よりも親の方が苦勞するからな」

きぬ「縁談でしたら私が欲しいくらいでございます」

恭介「縁談くらいいくらでもあつただろ」

きぬ「それは私にだって昔は。でも相手の方がどうしても嫌な男で。髪結いの亭主になつて自分は遊びたいことが見え透いておりまして。ですの私、お見合いの席で飯をすべて平らげてしまいました。それから牛がいてと町内で噂されてこの年に……」

恭介「きぬ。俺のそばに來い」

きぬ「へっ？」

恭介「きぬを引き寄せる。」

きぬ「そ、そんな急に……」

きぬ「瞬間に向かつて飛んで來る小石。」

きぬ「！」

離れた所から、結髪の女たちがきぬを睨んでいる。

きぬ「……」

きぬと恭介、足早に歩いてく。

○恭介の家・内

きぬ「逸見様がですね、りんさんを縁談させたいようで、私に良い人がいるかなんてお尋ねになるのですよ。りんさんもそのようなお年なのですね」

りん「……」

きぬ「でもですね。嫌だったらはっきりとお断りするのですよ。なんでしたら相手が断るように仕向ける技をお教えいたします」

りん「お父様が決めたことでしたら、私は従うほかございませぬ」

きぬ「武士の家は大変でございますね。町人は氣樂でございます」

りん「……」

きぬ「いずれにせよ、かわゆい髪型にいたし

ます」

りん「もっと短く切ってください」

きぬ「短く？　これ以上は無理ですよ。結う

ことができませんります」

りん「やつてください。そうでないと、お父様が死んでしまいます」

きぬ「はい？」

○同・表

恭介が立っている。

武二が裏路地の角にやってくる。

恭介「……」

○同・内

きぬとりん。

りん「お父様が無理してでもきぬさんに髪結いを頼んだのは、私を一日でも早く嫁に出して東京で独りにさせないためなのです」

きぬ「それでどうして逸見様が？」

りん「武士の世を諦めきれぬ者たちが、まだ

いるのです」

きぬ「逸見様が人斬りをする……」

りん「……」

○裏路地

恭介と武二。

武二「数日以内にやる。覚悟しておけ」

恭介「……」

○恭介の家・内

きぬとりん。

りん「東京に来た時から事は始まっていたのです。潜伏する同胞の助けがなければ、ここに住むこともできなかつたゆえ」

きぬ「荒事はいけませぬ。そのようなのは今

すぐ抜けていただきませぬ。そのようなのは今

りん「それが許されぬのが武士なのです」

きぬ「……」

○裏路地

武二が恭介を残して去って行く。

○恭介の家・内

きぬとりん。

きぬ「人斬りは打ち首です。こないだも政府高官を斬った不平士族の者が」

りん「それでもやらねばならぬのです。町人

なんかと一緒にしないでください」

きぬ「何を生意気な！これだから武士の娘ってヤツは！坊主にしますよ！」

りん「私は武士の娘でございます。ですから自らの覚悟も……」

道具入れの中にある西洋バサミを見る。

○同・表

恭介がやってくる。

刀の柄に手を置いて天を仰ぐ。

目をつむって大きく深呼吸。

きぬの声「りんさん！いけませぬ！やめて！いやあああ！」

恭介「！」

○同・内

恭介が慌てて入って来る。

腰を抜かしているきぬ。

畳に落ちている大量の髪の毛。

恭介「りん！」

西洋バサミを手になっているりん。

髪が首ほどの長さで切られている

りん「お父様。りんはまたこの部屋から出る

ことができなくなりました。縁談もこれでは無理でございました」

恭介「……」

りん「お父様。私を独りにしないでください」

恭介「落とし前を付けねばならぬのだ」

りん「戦は終わったのです。まだ人を斬らねばならないのでしょうか？」

恭介「武士の家に生まれた者なら分かるだろ。

やらねばならぬのだ」

きぬ「逸見様！女が命である髪を落として

申しておるのです！　その意味を存じない
と言うならば、あなたは畜生どもと変わり
ございませぬ！　私とて上野の戦を見てお
ります！　どれほど血を流せば気が済むの
ですか！　どれほどの町を燃やせば、武士
というのは気が済むのですか！

恭介「……」
きぬ「逸見様！」
表から走る足音が近づいてくる。

駆けてきた武二が顔をのぞかせる。

武二「改めだ！」

鳴り響く笛の音。

一目散に逃げていく武二。

恭介「クソっ……」

きぬ「戻ってはなりませぬ！　あなたを心か
らお慕いする者はそちらにおりませぬ！」

恭介「……」

きぬ「逸見様。私たちの方へ。どうか」

恭介「きぬ……。りん……」

きぬ「……」

りん「……」

去って行く恭介。

りんが泣き崩れる。

表に飛び出すきぬ。

○同・表

あつという間に小さくなる恭介の背中。
邏卒たちが恭介を追っていく。
呆然と立ち尽くすきぬ。

○髪結床・店内（夕）

立ち尽くしているかやと長吉。

二人の前にはきぬとりん。

りんは頬かむりをしている。

きぬ「しばらくうちで預かるから」

かや・長吉「……」

○同・きぬの部屋（夕）

りんが鏡台に映る自分を見るが、すぐ
に目を背ける。

きぬが西洋バサミを手に残りに立つ。
りん「いい？」
きぬ、りんの髪をといて乱れたところ
を切り整えていく。
きぬ「最初会った時もこんなことしたわよね。
そのうち本当に坊主になるわよ」
りん「私は鶴ヶ城が落ちる前に自刃して果て
なければならなかったのです。それが武士
の家に生まれた女の最期の勤めでした」
きぬ「……」
りん「でも、私は刀を手にした叔母の手から
逃げだして」
きぬ「……」
りん「戦が終わり、幸運にもお父様と再会い
たしましたが、故郷では私が生きているこ
とが恥とされて」
きぬ「それで逸見様と東京に？」
りん「お父様が私を守るために」
きぬ「……」
りん「きぬさん」
きぬ「ん？」
りん「先ほど、お父様をお慕いする者はそち
らにおりませぬとおっしゃっていましたが、
それはどういう意味でございますか？」
きぬ「私そんなこと言った？」
りん「はつきりと聞こえました」
きぬ「そりや、りんさんのことよ」
りん「きぬさんはお父様をどう思いで？」
きぬ「……。お得意様かしら」
りん「私は構いませぬ。お父様がお選びにな
られる方でしたら。たとえ町人の方でも」
きぬ「重ねて四つは勘弁して！」
りん「母上は離縁しておりますゆえ、何もご
心配はございませぬ！」
きぬ「こ、子供が大人に口を出さないでちょ
うだい！ 生意気な！」
りん「私はもう子供ではございませぬ」
きぬ「いいえ！ 子供ね」
りんの前髪を束ねてこけしにして、鏡
を見せる。

きぬ「ほら！　かわゆいでちゆね！」

りん「きぬさん！」

きぬ、髪の毛を左右に束ねて今で言う
ショートツインテールにする。

きぬ「きやあゝ。犬みたいにかわゆい！」

りん「犬！」

りん、きぬの後ろに立って。

りん「犬と言われて黙っていられる武士の娘
はおりませぬ！　ご覚悟を！」

きぬ「いやいや！　私はいいから！」

りん、きぬの「英吉利結び」をといて三
つ編みをグルグルと巻き上げる。

後の「夜会巻き」のような髪型になる。

りん「できました！」

きぬ「なにこれ？　まいまい？」

りん「次参ります！」

きぬ「私の番だから！」

りんときぬ、お互いの髪をいろんな髪
型にしあう。

○同・庭（夜）

すっかり陽は落ちている。

○同・きぬの部屋（夜）

きぬとりんが乱れた髪のまま仰向けに
なっている。

きぬ「逸見様はどのような髪型がお好きなの
でしょうね」

りん「きぬさん。やはりお父様のことが？」

きぬ「わわわわあ！」

りん「……。お父様」

りんの表情が暗くなる。

きぬ「……」

たみ「きぬ！　きぬきぬきぬ！　
たみが息を切らして転がり込んでくる。

たみ「きぬ！　きぬきぬきぬ！」

たみ「ぎやあああ！　あんた切り過ぎよ！」

きぬ「うるわいわね。お腹の子もうるさいっ
て言ってるわよ」

たみ「それより大変よ！　さつき喜次郎くん

がお偉いさんの家から戻ってきたの！ 白
粉やら筆やら何やらを届けて！ そこで聞
いたらいいのよ！ 喜次郎くんが！

きぬ「喜次郎は分かったから。で？」

たみ「お、女は髪を切ってはならぬと」

きぬ「はい？」

たみ「女は髪を切ってはならぬ！ そういう
お触れが出されると！」

きぬ「女は髪を切ってはならぬ？」

○高札馬

高札を見上げる人々。

きぬもその中にいる。

婦人断髪禁止令を告げる高札。

髪の短い女たちが頭を隠して、そそく
さと去って行く。

きぬ「……」

○髪結床・きぬの部屋

きぬとりん。

きぬ「男女の区別がなくなるから女は散
切りにするなって！ そんなことあるワケ
ないでしょ！ 猿でもわかるわよ！ これ
だから御上は！」

りん「前にも髪結いの取り締まりがあったと、
学んだことがあります」

きぬ「あれは確か老中の水野公が亡くなった
取りやめになったはず……。こうなったら
逸見様に東京府のお偉いさんを」

りん「言って良いことと、ならぬことがござ
います！」

きぬ「申し訳ございませぬ……」
かやが入って来る。

きぬ「……」

かや「きぬ。良い機会です。これからあなた
を本気で一人前の髪結いに育てます。とめ
さんの髪結いに行くからついてきなさい」

きぬ「……」

かや「で、あなたはこれからどうするのです
か？ ごく潰しは勘弁ですよ」

りん「……」
かや「これから東京にいるのならば、やるべきことを自分で見つけなさい。ここでは子供扱いなど誰もいたしませぬよ」

りん「……」
かや「きぬ。早く支度を」
きぬ「……」

○永蘭屋・廊下

頬かむりのきぬ。

ゆりに続いて、かやと歩いてくる。

ゆりも頬かむりをしている。

ゆり、部屋の前で止まって。

ゆり「奥様」

とめ「どうぞ」

かや「失礼いたします」

かや「戸を開けるかや。」

きぬ「？」「これは！」

○同・とめの部屋

きぬとかやが入って来る。

部屋の中には、とめをはじめとして髪を短くした女たちが詰めている。

後ろのゆりが頬かむりを取る。

ゆりの髪型は「まがれいと」である。

とめ「断髪禁止令がなんですか！ 重たくて臭くて、男よりも虫が寄ってくる結髪に今

さら戻せと！」

女1「高枕で二度と寝とうございませぬ！」

女2「髪を洗って一日を終えたくありませぬ！」

ぬ！」

女3「鳥の巢に間違われたくありません！」

とめ「例え髪を切っても、打ち首や島流しになるわけではございませぬ。たかが罰金で

す。しかも許可状出せばいくらでもゴマかせるざる法でございます」

きぬ「……」

とめ「私たちは私たちの好きな髪型にすれば

よろしいのです」

拍手喝さいの女たち。

とめ「きぬさん。どうかお力を貸してください」

きぬ「……」

頬かむり取る。

女たち「きぬの髪型は「英吉利結び」である。」

大盛り上がり。女たち。

かや「いい加減にしない！」

きぬ「お母様。これから私たちは私たちが私たちで自分の髪型を決めるのです。結髪でも散切りでも。好きな髪型に」

かや「何言ってるのよ。あんた殺されるわよ」

きぬ「へっ？」

かや「天保の取り締まりを知らないから呑気なことと言えるのよ。女髪結いは何をされたか。職を追われただけならマシな方よ。目を付けられた女髪結いは投獄されて、髪を無理やり剃られたのよ。私たちの命を」

きぬ「しかしもう明治になって」

かや「今の政府が徳川様よりまともだと思ってるの？ あれしろこれしろと朝令暮改ばかり。すぐにひどいことになるわよ」

きぬ「……」

かや「とめさん」

とめ「嫌でございます」

かや「ここはあなた一人の家ではないのです。あなたはこの家を守らなくてはならない身なのです。ことにあなたがその髪型にしてから客が減ったとお聞きしております」

とめ「……」

鏡台の前に座る。

かや「女の支度をやたらと見るものではありません」

女たちが渋谷と部屋を出て行く。

かや「とめの髪を丁寧にといていく。」

かや「女髪結いと言うのはひどい仕打ちを受けながらも、その技を密かに守り抜いてき

たのです。その技をあなたも引き継いでい

かなくてもなりません」

きぬ「お母様は明治の世にならなければよ

かったとお思いで？」

かや「世が変わっても、変わらぬものがある

ということです。私のことを不平士族の人

斬りみたいに言わないでちょうだい」

きぬ「あなた方はもがいておるのです。き

つと、自分たちの生きる場所を探して」

かや「ただの憂さ晴らしです。そうでなけれ

ば明治の世に生きることができず、死に場

所を探しているだけです」

きぬ「死に場所……」

かや「きぬ。付け髪を手にとつて。」

かや「きぬ。コツとしては根元の方から」

かや「きぬが部屋を飛び出していく。」

かや「きぬ！」

○街中

きぬが走っている。

○神田川・河川敷

きぬが走ってくる。

川の前で立ち止まって、声を上げて泣

き出す。

恭介の声「うるさい！」

きぬ「！」

恭介「恭介が草むらから顔を出す。」

恭介「人が昼寝しているときに……」

きぬ「逸見様！」

恭介「きぬ……」

涙でぬれたきぬの顔。

恭介「恭介が懐から手拭いを差し出す。」

きぬ「……」

きぬ「きぬ、恭介の手拭いを受け取ると川で

濡らして顔を拭く。

きぬ「私はハレンチな女でしょうか？ 男に

見えませんでしようか？」

恭介「断髪禁止令か」

きぬ「逸見様はどうお考えで」

恭介「悪いが人を待っている。すぐに帰れ」
きぬ「……。逸見様は死に場所を求めて東京へお越しに？」

恭介「……」
きぬ「りんさんは逃げて生きたゆえに故郷では生き恥と。りんさんのために逸見様は東京へ。そうでございますよね？」

恭介「……」
きぬ「りんさんが生きる場所を見つけるために、逸見様は東京へ」

恭介「逃げたのは俺の方だ。薩長が会津若松に来る前に戦場から。一人も斬らずに」

きぬ「……」
恭介「故郷にいらなくなったのは俺だ。りんではない。死ぬべきだったのは俺なんだ」
きぬ「忘れましょう！　ここでは誰も逸見様のことは責めませぬ！」

恭介「他人が許しても俺が許さぬ。武士として生まれた者として恥じるべきことだ」

きぬ「りんさんは逸見様のお帰りを望んでおられます。これ以上のことがありますでしょうか？」

恭介「りんには大人になってもらう。父親などもういらぬ」

きぬ「りんさんはそれでよしとしましょう。でも私は無理でございます！　逸見様にお会いする前には戻れませぬ」

恭介「きぬ……」
きぬ「私、逸見様のことを」

恭介「言うな！」
きぬ「お慕いしております！」

恭介「……」
きぬ「逸見様……」

恭介「やらねばならぬのだ。やらねば」

きぬ「女を悲しませるのが武士道というならば、今すぐお捨てくださいませ。私と共に生きてくださいませ」

恭介「きぬ……」
川べりの道を立派な馬車が通るのが見える。

馬車には関沢博信（39）が乗っている。

恭介「！」

とっさに追いかける恭介。

きぬ「逸見様！」

恭介「ハレンチなどありえぬ。その髪型は美しい。きぬ、そのものだ」

走り去る恭介。

呆然とたたずむきぬ。

その手には手拭いが残されている。

○髪結床・店内（夜）

長吉が座っている。

かやが入って来る。

長吉「今日は一人も客が来なかったわ。みんな散切りにしまったよ」

かや「……」

長吉「日本橋にできたとかいう西洋理髪店、えらく繁盛してるみてえだ。こうなっちまったらもう戻れねえ。髪結いはお終いだ」

かや「……」

○同・きぬの部屋（夜）

りんが鏡台の前に座り、自分の髪に触れて見つめている。

縁側の戸が開く。

りん「！」

きぬが入って来る。

りん「お、お帰りなさいませ」

きぬ「……」

りん「きぬさん？」

きぬ「きぬの手には手拭い。」

りん「それはお父様の！」

きぬ「神田川のところで」

りん「お父様は？」

きぬ「行ってしまわれました」

りん「どうして……。お父様にまた戦をさせる気ですか？」

きぬ「逸見様は戦から逃げていたようです。」

一人も斬らず」

りん「……」

きぬ「今まで武士の生業から逃げていたのです。最期に人を斬り、死に場所を得ることができたのであれば、逸見様は武士として見事に生きたことに」

りんが泣き出す。

きぬ「……」

喜次郎が戸を開く。

喜次郎「りんさん。失礼しますよ。あれ？ 姉さんいたのですか？」

泣いているりんを見て。

喜次郎「姉さん！ りんさんになんてこと！」

きぬ「喜次郎！ 女のいる部屋に勝手に入るもんじゃありません！ あんたって子は！」

喜次郎「頼んだのは姉さんだろ。持って来いって」

鏡台を抱えて入って来る。

りん「これ、うちからですか？」

喜次郎「大変だったんですよ。邏卒がうるちよろしてて。近いうちに参議が狙われると噂もあるようで」

きぬ「参議？」

喜次郎「老中みたいなお役目の方です。川に向こうでたまに見ますよ。二号が住んでるとか住んでないとか」

きぬ「ちよつと待って。川ってどこの川？」

喜次郎「ここら辺で川と言ったら神田川しかないじゃないですか。何を寝ぼけたことを」

きぬ「逸見様と会ったの。神田川のところで。」

逸見様、馬車を追いかけていかれて」

喜次郎「……。斬る気なんですよ。参議を」

きぬ・りん「……」

喜次郎「邏卒に知らせましょう！」

りん「いけませぬ！ 捕まればお父様は！」

喜次郎「犯行前ならばきっと罪も軽く……。」

ならないでしょうな」

りん「先にお父様を見つけて止めれば良いのです！」

喜次郎「そりや俺にも逸見殿に恩義はあるが。

二度も目を覚ませてくれて……」

りん「では参りましょう！」

喜次郎「血の気の多い仲間もいると思います。下手すればこっちが斬られて！」

りん「きぬさん！」

きぬ「きぬ、恭介の手拭いを見つめて。」

きぬ「私の髪型は美しいと、あの人は言ってくれました。それだけでも、私には良い思い出になりました」

りん「……」

きぬ「でもそんな言葉だけで私を満足さようなんて！ バカにするのもいい加減にしろもらいたいわ！ なによそれ！ 最低でもカステラ百個添えてくれないと、私は絶対に許さないから！」

りん「きぬさん……。では！」

かやが入って来る。

後ろに隠れるように長吉もいる。

喜次郎「母さん？」

かや、きぬを捕まえて畳に投げ飛ばす。

りん・喜次郎「！」

かや「破れかぶれもいい加減にしなさい！ 不平士族の仲間と思われて捕まれば同罪！ 打ち首にされるわよ！」

きぬ「髪型一つ認めない政府なんて！ 死んだら化けて出てきてやる！」

かや「断髪禁止令など、あんなバカげたお触れなどすぐになくなります！」

きぬ「へっ？」

かや「御上の戯言などいつの世も潰れているのです！ それまで耐えなさい！ 耐えれば、これからはあなたの時代になります！」

きぬ「……」

かや「女が美しくなりたいという思いを止められるとでも？」

きぬ「母さん……」

かや「遅くなっただけ、ゆうげにしますよ。喜次郎。良かったらたみさんも呼んで……」

きぬが西洋バサミを手にとって、髪を首筋が見える長さに切り落とす。

力が抜けて座り込むかや。

りん「お見事！ その覚悟受け止めました！
共に参りましょう！」

きぬ「喜次郎！ 参議の屋敷つてどこ！」

喜次郎「麴町です！ 前にあそこら辺に物を

届けたことがあります。半蔵門の東です」

きぬ「半蔵門は御城の反対側よね」

喜次郎「ここからは一里ほどあるかと」

きぬ「喜次郎！」

喜次郎「はい！」

きぬ「りんを家から出さないで。絶対に」

喜次郎「へっ？」

りん「きぬさん？」

きぬ「喜次郎！」

喜次郎「はい！」

りん「りんを素早く捕まえる。」

きぬが振り返ることなく飛び出してい
く。

りんは抵抗するも喜次郎は離さない。

あたふたと何もできない長吉。

かやがきぬの切り落とした髪を拾う。

かや「この店、西洋理髪にしましょうか」

長吉「へっ？」

かや「私たちも覚悟しないといけないってこ
とよ」

りんが喜次郎の腕の中で泣き崩れる。

○路上（夜）

きぬが必死に走っている。

○関沢の屋敷・表（夜）

人通りはほとんどない。

離れた路地に浪人たちがいる。

○路地（夜）

恭介、武二ら浪人たちが五人ほどひそ

んでいる。

皆、帯刀で鬚を結っている。

武二「関沢は中にあるな」

恭介「……」

武二「おい」

恭介「神田から追いかけた。間違はなく今は中にいる。女も一緒だと思う」

武二「お前を神田に住ませたのは正解だったな。女も抵抗したら斬り捨てろ」

恭介「……」

○関沢の屋敷・勝手口（夜）

見張りの邏卒が立っている。

武二が背後から静かに邏卒を刺し殺す。恭介たちが侵入してくる。

○同・縁側（夜）

明かりを落として静まり返った屋敷内。

恭介たちが静かにやってくる。

武二、そっと戸を開けると恭介に先に行くように指示する。

恭介、中へ入っていく。

○九段坂（夜）

江戸城の堀に沿って、きぬが走っている。

○関沢の屋敷・廊下（夜）

恭介たちが進んでいく。

分かれるよう指示を出す武二。

うなづく一同。

抜刀する武二。

他の者も続けて抜刀。

恭介も静かに抜刀する。

散らばる一同。

恭介は一人で奥へ進んでいく。

○半蔵門前（夜）

走って来るきぬ

江戸城半蔵門前の道を右に曲がる。

○関沢の屋敷・廊下（夜）

恭介が進んでいる。

とある部屋の前で止まると、ゆっくり

と戸を開ける。
中をのぞくと関沢とあき（28）が同じ床で寝ているのが見える。

○同・寝室（夜）

恭介が静かに戸を開けて入ってくる。
刀を握り直す恭介。

寝ている関沢とあきに近づく。

いびきをかく関沢。

あきが起きる。

あき「もう……」

目の前に立つ恭介に気が付く。

あき「……きやあああ！」

起きる関沢。

関沢「なんだよ……うわああ！」

恭介が刀を構える。

関沢「ひいひい！」

関沢があきを恭介に向かって蹴っ飛ばす。

恭介にぶつかるあき。

体勢を崩す恭介。

関沢はその隙に部屋を飛び出す。

恭介「どけえ！」

あきに刀を振り上げる。

あき「いやああ！」

恭介、あきの髪型が「英吉利結び」であることに気が付く。

恭介「……その髪型はなんだ？」

あき「へっ？」

恭介「その髪型はなんだと申したはずだ！」

あき「神田の髪結いにやってもらったのでござ

います！ カステラに目がない！ 申し

訳ございませぬ申し訳ございませぬ！」

恭介「きぬか？」

あき「……ご存じで？」

恭介「……」

刀を納める恭介。

何事もなく部屋から出て行く。

あつけに取られて動けないあき。

表からけたたましい笛の音が聞こえる。

○ 関沢の屋敷・表（夜）

きぬがやってくる。

やじ馬や邏卒が集まって騒ぎとなっている。

束縛されている数人の浪人。

きぬ「……」

恭介はいない。

関沢が邏卒にしがついて震えている。

あきが屋敷から出てくる。

関沢「おお！ 無事であつたか！」

あき、関沢を思いつきり平手打ちする。

○ 路上（夜）

恭介が歩いていく。

武二が前に立ちふさがる。

すでに刀を抜いている。

恭介「！」

武二が恭介に斬りかかる。

○ 関沢の屋敷・表（夜）

あきがきぬに気が付く。

あき「きぬさん！」

きぬ「へっ？ あっ……」

あき、邏卒を気にしながら。

あき「あなた、不平士族と通じて？」

きぬ「……。いえいえいえ！ 断じてそ

のようなことは！ ……。へっ？」

○ 路上（夜）

恭介が鞘で武二の刀を受けている。

恭介を蹴り飛ばす武二。

倒れる恭介。

○ 関沢の屋敷・表（夜）

きぬとあき。

あき「刺客がこの髪のことを尋ねまして。神

田の髪結いにしてもらったと申したら、き

ぬさんのお名前を」

きぬ「……」

あき「ご安心を。女の実秘は守ります！ し
かし、その髪は……」
きぬ「その方はどちらに！」

○路上（夜）

斬りかかる武二に対して、恭介は刀を
抜かずに鞘で応戦している。

武二「抜けえ！ おめは武士だろ！ 恭介！」
恭介の手が柄に伸びる。

恭介「……」
武二「やるしかねえだろ！ 俺たちはもう戻
れねえんだよ！」

恭介「……。俺はもう戻ろうとは思わぬ」

武二「なんだと？」

恭介「戻るのはない！ 行くのだ！」

武二が氣組をあげて上段の構えから斬
りかかって来る。

恭介、間合いを一氣に詰めて武二の小
手に鞘を振り落とす。

悲鳴を挙げて倒れる武二。

左の前腕が折れている。

呼吸を整えて去って行く恭介。

撃鉄が起こされる音。

咄嗟に振り替える恭介。

武二が拳銃を構えている。

恭介「！」

○関沢の屋敷・表（夜）

きぬとあき。

きぬ「その人はどちらに！」

銃声が響く。

きぬ「！」

邏卒たちが一齊に駆けだしてく。

きぬも続いて走り出す。

○路上（夜）

きぬがやってくる。

邏卒が武二を捕まえている。

落ちている拳銃。

近くには血痕。

きぬ「……」
血痕が裏路地へと続いている。

○裏路地（夜）

きぬが所々に落ちている血を足で消しながら進んでいく。

古井戸のそばに何者かがいる。

慎重に進むきぬ。

恭介が座り込んでいる。

きぬ「逸見様！」

恭介の脇腹が血でにじんでいる

きぬ、恭介の着物を剥いで傷口を見る。

きぬ「……」

恭介「きぬ……。また髪を切ったのか？」

きぬ、手拭いで恭介の脇腹を抑える。

恭介「うう！」

きぬ「そんな今はどうでもよいことです」

恭介「いや。最期に見るものとして、これ以上のものはない」

恭介が刀を抜く。

きぬ「逸見様？」

月明かりに輝く刃に汚れは一切ない。

恭介「力が入らぬ。頼む」

きぬ「りんさんがうちで待っておられます！私と一緒に参りましょう！」

恭介「東京は誠に楽しかった。礼を言う」

きぬ「私は卑しい町人でございます。ゆえに武士の作法などクソ喰らえでございます」

恭介から刀を奪うきぬ。

恭介の鬚を掴むと切り落とす。

呆然とする恭介。

刀と鬚を古井戸に捨ててきぬ。

恭介「きぬ……」

恭介に抱き付くきぬ。

きぬ「ご無事で何よりでございます」

恭介「きぬは残酷だな。腹を切って死なせてくれれば良いものを」

きぬが恭介の脇腹をつねる。

恭介「いだああ！何をやる！」

きぬ「ちよっと弾がかすったくらいでなんで

すか？ それでよくも偉そうに武士などと」
恭介「なっ！」

立ち上がるきぬ。

きぬ「では参りますよ！」

恭介「待てきぬ！ 一人で立つのは無理だ！

頼む！」

きぬ「……」
洩々と恭介に手を伸ばす。

恭介「かたじけない」

きぬ、恭介の手を掴むとそのまま押し倒す。

○髪結床・表

店構えは変わっていないが、「西洋理髪」の看板がかかっている。

○同・店内

理容椅子が鏡の付いた壁に向かって配置されている。

椅子に座るきぬ。

りんがきぬの髪を整えている。

りんの髪型は「まがれいと」である。

きぬ「できました！」

きぬ「……なにこれ？」

きぬの髪型が後の大正モダンガールの「耳隠し」のようになっていた。

りん「髪が結えないならこうするしか」

苦笑いのきぬ。

かやと長吉がやってくる。

かやは結髪、長吉は散切り頭である。

きぬ「母さん！ りんが変な髪に！」

かや「うん。いいと思うわ」

りん「ありがとうございます！」

きぬ「りんばかり甘やかさないでください！」

かや「元服までよ。それから髪結いとして

覚悟しなさい」

りん「へえ……」

たみが入ってくる。

髪型は「英吉利結び」。

手に紙を持っている。

たみ「きぬ！ 断髪許可書もらってきた！
これを適当に書いて出せば……。なにその
髪型？」

きぬ「りんがやったの。たみもやる？」

たみ「……。やめとく」

喜次郎がサインポールを抱えて入って
来る。

喜次郎「父さん！ これどこに置きます？」

長吉「中においても客が来ねえだろ！」

喜次郎「そっか。ん？ 姉さん、その髪は」

笑いをこらえる喜次郎。

喜次郎の後ろに恭介が立つ。

恭介は散切り頭で刀は持っていない。

恭介「りんが作った髪型のようだが」

喜次郎「いとかわゆしでございます！」

微笑む恭介。

きぬもつられて微笑む。

長吉「喜次郎。早くそれを出せ」

喜次郎「はい」

喜次郎、サインポールを持ち上げよう
として体勢を崩す。

喜次郎「おわっ！」

恭介と長吉がとっさに支える。

喜次郎「このまま！ このまま外に！」

恭介「お義父さんも持つてください！」

長吉「持つてるわ！」

きぬ「……。うちの男たちって、なんでこんな
に頼りないんだろね」

たみ、りん、かやは、かやの頭に乗って
いる櫛に夢中。

たみ「これ銀座ですか？」

かや「とめさんにもらったの。いいでしょ？」

りん「いいなあ。私も結髪にしようかな」

一人取り残されるきぬ。

鏡の自分を見つめる。

首を振って髪を揺さぶる。

再び鏡の自分を見つめる。

きぬ「……。ひゃ！」

思わず手で口を覆う。

〈終〉

【参考文献】

○髪型関連

- ・金沢康隆（1961）『江戸結髪史』、青蛙房
- ・橋本澄子（1967）『日本の髪』、三彩社
- ・村田孝子編著（2000）『結うこころ…日本髪
の美しさとその型…江戸から明治へ』、ポ
ーラ文化研究所
- ・村田孝子編著（2003）『近代の女性美…ハ
イカラモダン・化粧・髪型』、ポーラ文化研
究所
- ・撫子凜著・ポーラ文化研究所監修（202
4）『日本髪を描き方』、エクスナレッジ

○文化風俗歴史関連

- ・文廼舎（1901）『婦女かゞみ…家庭教育』、
石塚書店
- ・尾佐竹猛（1934）『明治文化叢説』、学芸
社
- ・内山惣十郎（1968）『明治はいから物語』、
人物往来社
- ・平出鏗二郎（1983）『東京風俗志（日本
風俗叢書）』、日本図書センター
- ・小野秀雄編（1968）『新聞資料明治話題
事典』、東京堂出版
- ・至文堂編集部編（1968）『明治事物起源
事典』、至文堂
- ・伊藤好一（1987）『江戸の町かど』、平凡
社
- ・今西一（2001）『歴史文化ライブラリー…
127 文明開化と差別』、吉川弘文館
- ・星亮一（2003）『会津落城…戊辰戦争最大
の悲劇（中公新書）』、中央公論新社
- ・杉浦日向子監修（2003）『お江戸でござ
る…現代に活かしたい江戸の知恵』、ワニブ
ックス
- ・石井明（2016）『江戸の風俗事典』、東京
堂出版
- ・横山友子（2016）『黒髪と清潔―明治中
期…大正にかけての婦人衛生雑誌から読み
解く黒髪の変遷』『人間社会学研究集録12

- 号』、大阪府立大学大学院人間社会学研究科
- ・大丸弘・高橋晴子（2016）『日本人のすがたと暮らし』明治・大正・昭和前期の身装』、三元社
- ・野口武彦（2018）『幕末明治不平士族ものがたり（草思社文庫）』、草思社
- ・藤田覚（2021）『へ名奉行の力量』江戸世相史話（講談社学術文庫）』、講談社
- ・野口孝一（2024）『明治・大正・昭和銀座ハイカラ女性史』新聞記者、美容家、マネキンガール、カフェー女給まで』、平凡社
- ・千代田区ホームページ、
<https://www.city.chiyoda.lg.jp/koho/kuras-hi/volunteer/chomeiyuraiban/choumei/kaji-1.html>
<https://www.city.chiyoda.lg.jp/koho/kuras-hi/volunteer/chomeiyuraiban/choumei/kaji-2.html>
<https://www.city.chiyoda.lg.jp/koho/kuras-hi/volunteer/chomeiyuraiban/choumei/kandakaji-3.html>
- ・楽心館ホームページ「小野派一刀流（会津伝系）の系譜と思想」、
<https://aiki.jp/daitoryu/onohaittouryukenjyutsu/>

○新聞

- ・北根豊監修（1992）『日本初期新聞全集』編年複製版・35（明治5年2月（1872年3-4月））』、ペリかん社
- ・北根豊監修（1992）『日本初期新聞全集』編年複製版・36（明治5年3月（1872年4-5月））』、ペリかん社
- ・北根豊監修（1994）『日本初期新聞全集』編年複製版・45（明治6年1月1日（1873年1月）-明治6年1月25日）』、ペリかん社